

何なにをか真人しんじんと謂いう。古いにしえの真人しんじんは寡とほしきにも逆さからわず、成さかなるにも雄ほこらず、士ことを謀はからず。然かくの若ごとき者は、過あやまても悔くいず、当あたれども自得じとくせざるなり。然かくの若ごとき者は、高たかきに登のぼるも慄おそれず、水みずに入るも濡ぬれず、火ひに入るも熱あつからず。是これ知ちの能よく道みちに登仮とうかするや、此かくの若ごとし。古いにしえの真人しんじんは、其その寝いぬるや夢ゆめみず、其その覚さむるや憂うれいなく、其その息いきするや深深しんしんたり。真人しんじんの息いきは踵かかとを以もつてし、衆人しゅうじんの息いきは喉のどを以もつてす。其その耆欲しよくの深ふかき者は、其その天機てんきも浅あさし。

【大体の意味内容】

いったい何なにをもつて、真人しんじんというのか。むかしの真人しんじんは、貧まずしい境遇きやうぐうにあつても、そこから脱出だつしゅつしようと企くわだてず、運命うんめいに逆さからおうとはしなかった。逆ぎやくに繁盛はんじやうしていたとしても、それを誇ほこることはせず、何事なにごとにつけ謀略ぼうりやくを張りめぐらせたりはしなかった。このように、天てんの計はからいと一体化いつたいかしている者は、たとえ過失かしつに見舞みまわれても己おのれの生き様いざまを悔くいることはない。何なにかに成功せいこうしても、自分じぶんの手がらとしてうぬぼれることもない。こうした境地きやうちにある者は、高たかい処ところに登のぼつても、目めがくらみ恐れ慄おそくことがない。水みずに入はいつて溺おぼれることなく、火ひに入はいつても熱あつさを感じない。このことは、知性ちせいが、小ちひさな個人こじんの賢さかしらにとどまらず宇宙うちゅうの大原理だいげんりにまで登りつめ、仮面かめんと本体ほんたいとが融合ゆうごうするようになればこそ、実現じつげんする。むかしの真人しんじんは、眠ねむるときは夢ゆめを見ないほどに深みへはまり、目覚めめざめて現実生活げんじつせいかつの厳きびしさちよくめんに直面しつめんしてもそれへの憂うれいなく、呼吸こきゅうするのも静しずかで深い。真人しんじんの呼吸こきゅうは、踵かかとで行おこなう深ふかいものだが、一般いっぱんの人々ひとびとの呼吸こきゅうは喉のどで行おこなう浅あさいものだ。ちつぽけな我欲がよくばかりが深ふかい者は、

ひと ほんらいそな てんき うちゅうてき いし はたら あさ
人として本来備わっているはずの天機、すなわち宇宙的意思の働きは、浅い。

順境にも逆境にも動じず、大手柄を立てても驕ることなく恬淡寂莫に休する趣のヒーローは、日本には実は少なくありません。最近ではすっかり流行語になっている「笑わない男」稲垣啓太選手がすぐ思いだされますね。彼のことも詳しく調べてみたいと思いますが、子どもたちのヒーローで元祖「笑わぬ男」と言えば、やはり「ウルトラマン」ではないでしょうか。

鞍馬天狗や月光仮面は、「覆面」で表情を隠しており、黄金バットは表情は変わらないが常に笑っている…。まぎれもない自分の顔で、表情に変化のないヒーローの嚆矢がウルトラマンかと思えます。

当時子どもたちにとっていろんな意味で衝撃的でした。異世界からやってきた超人が、普段は非力なひとりの人間として生活し、危急の時に変身（本性示現）し、命がけで怪獣と闘う。怪獣を倒してもそれで威張ったりガッツポーズを取ったりするのではなく、まるで反省しているかのようにうつむいてから、ふと天を見上げて夕日のかたに飛び去る。哀愁すら感じさせるその後ろ姿に、子どもたちは（私も）本当に参ってしまい、しびれてしまいました。

社会現象にもなった『ウルトラマン』は、同時に様々な批判にもさらされました。悪化する地球環境が生んだ怪獣を一方的に退治することが本当に「正義」なのか。怪獣との戦闘で破壊されたビル群をだれが弁償するのか、なぜさっさとスペシウム光線でやっつけないのか、等々。また口調で大人のロジックを受け売りする子もいました。

でもそうした議論を凌駕するほどの魅力が、あの能面の様なヒーローにはありました。大学に入って、まさかウルトラマンの産みの親に出会うとは思いませんでした。しかも私にとっての生涯の師になろうとは…

恩師上原輝男先生は、いわゆる有名人ではありません。知る人ぞ知る天才学者で、ラジオやテレビに出ることもありました。が、頑固一徹、ダメだと思えば番組制作者を容赦なく粉砕するので、煙たがられて有名にはなれませんでした。

そんな上原先生が、沖縄からやってきた意気軒昂な少年、金城哲夫には目をかけていて、創作の世界に進もうとする彼に、特撮の円谷英二氏を紹介しました。円谷プロで怪獣番組を制作しつつ頭角を現した金城哲夫が、やがて「ウルトラマン」を創りだしたのです。上原輝男の「心意伝承」学のエッセンスを取り入れて。

従来のヒーローとは異質で特異な存在を造形した金城哲夫と、彼を指導した上原輝男が、その後の日本人にとっての英雄像の原形を世に敷いた、といっても過言ではありません。けれど上原先生はおっしゃいました。

「創作などくだらん！我々が作ったのではなく、遥かな昔から受け継がれてきた深く長い心意を、偽りなく再生できたら、それが人々に受け入れられて名作となっているにすぎない。自分ひとりで作りだしたなどと思えばがるのは、愚の骨頂だ！」と。

